

海外出張の思い出（ナイジェリア編⑦）

高島敬明

ラゴスに戻り、いろいろな出来事が有りましたが日常をようやく取り戻すことが出来ました。今回は我々の日常を紹介します。無事に戻って何週間か後の、作業が休みの日に皆で大型バスに乗り込み博物館と動物園に遊びに行きました。博物館は現地人の土饅頭の家の様子が展示されているくらいでしたが、一つだけ目を見張るものが展示されていました。それは当時のオバサンジョ大統領の革命による政権奪取の時の前大統領の乗用車で、ハチの巣のように穴だらけでところどころ血糊で真っ黒になっていました。オバサンジョ元大統領は、イギリス連邦に所属しているナイジェリア国の第5代大統領（1976年2月～1979年10月）で、その後第12代大統領（1999～2007年）も務めています。大の親日家で10回以上の来日歴がある政治家です。次に動物園に行きました。小動物から大きな猛獣までいます。ガラス越しの明るい照明の下には蛇の展示場が有りました。気持ちの悪い毒蛇がたくさんいました。ワイワイ言いながら見ていましたが、前回に書いたグリーンズネイクのところで足が止まりました。小さな木の葉の陰にいるもの、水辺に潜んでいるもの、なまめかしい緑色をした小さな蛇です。説明文には、生息地ナイジェリア全土、ラゴス近辺の水のきれいな川に多い、との通訳の話でした。作業員たちと黙って顔を見合わせました。

日常の生活では、毎朝黄熱病の薬を7粒飲むことになっていました。壁に貼ってある自分の名前のところチェックを入れて確認できるようになっていました。我々全員は飲んでいましたが、高価な薬のため雇人には飲ませません。運転手のエマニエルは完全に黄熱病にかかっていました。野口英世博士が倒れたのもこの病気です。エマニエルはいつも微熱があるのか体をだるそうにしています。それでも「エマニエル、ゴー！」と言うと、しゃきっとして運転を始めます。彼らはプロの運転手として運転を始めると物凄いスピードで走ります。それがプロの運転



ホテル前のアンダーツリーマーケットでの買い物

手だと思っているのです。「エマニエル、私は日本には家族がいるのだ。事故には遭いたくない！」と話すとも分かって「アイシー、アイシー」と神妙になります。ところが30分もするとまた元のように気が狂ったように走り出します。運転手の唯一の財産は運転免許証です。免許証の取得システムは知りませんが、オリジナルの免許証を持ち歩く事はまずありません。コピーした用紙を免許証として持ち歩いているわけです。この国の警察、公務員の給料日は毎月25日と決まっています。20日を過ぎると各所で警察の検問が始まります。毎月の給料が無くなってしまふ頃だからだそうです。黒人の車は余程のことがない限り止められることはありません。見ていると白人が乗った車だけです。日本人も「オイボ」と言って白人扱いですので車は止められます。するとエマニエルが「マスター、マニーマニー」と叫びます。1ナイラ（約300円）でいいそうですがそれを2cmくらいに小さく折りたたんで握手するように手に隠すように持っています。検問所でとうとう私の車になりました。エマニエルは現地語で何かしゃべりました。警官と握手しますと、「オーケー、ゴー」と警官の声がします。無事通過です。握手の時にダッシュ（賄賂）を渡したのだそうです。彼らには強いプライドがあり、お札を広げて渡せば絶対に受け取らず免許証の提示を求められるのだそうです。コピーでは検問は通過できずごたごたと時間がかかる

そうです。警官はチェコ製の短機関銃を胸に抱くように持っています。検問を通過する時たまに2～3人の警官が後ろで走りながらガシガシと機関銃の安全ピンをはずす音がします。この時は後ろから撃たれるのではと非常に緊張します。聞けば黒人の車が検問を突破しようとしたのです。私の車も間違っただけで後ろから撃たれても「逃げたから撃った」と言えば警官への責任は問われないうえです。

毎日の黄熱病の7粒の薬は非常に強力に体の解毒作用をしている肝臓には大変な負担になります。解毒が追い付かなくなると体全体が痒くなってきます。痒くなってきたと話す作業員には、「シャワーだけで湯船に入らないからな！仕方がないよ」と話しますが、後から到着した私も体全体が痒い気がします。Hマネージャーとその話題になった時、Hさんは「俺は肝臓が悪いから薬も酒も飲まないんだよ」と笑って話していました。ところが酒も飲まないと言っていたHさんが好きなウイスキーを浴びる様に飲んでいたので。周りを見るとハウスキーパーとT料理長が心配そうに成り行きを見ていました。Tさんは私に盛んに目配せをするのですが何のことか分からず、Hさんのお相手を続けていました。「高島君、体が痒いって？俺の部屋の風呂に入れよ！シャワーしかない風呂と違って気持ちがいいぞ！」と、言います。「いいですよ」「入れよ！」押し問答の末入ることになりました。Hさんの座った目が鋭く獲物を捕らえたようににやりと笑いました。部屋に入るとハウスキーパーが湯船にお湯を張っていました。湯船がいっぱいになるとすっとなでいなくなりました。私は仕方がないか、と素っ裸になりました。湯船に入ると何故かHさんが剣道の竹刀を持って来ました。会社の事務服のまま湯船のカーテンを開けて竹刀を杖にして手をのせ仁王立ちです。状況が普通でないで黙って入っていました。体も温まったので、「もういいか」と独り言を言って立ち上がろうとしましたが、「まあいいじゃないか、滅多に入れないんだから！」と仁王立ちです。命令口調になり同じことを繰り返し言われます。私はゆでだこのように真っ赤になって耐えていました。そのうちクーラーの風で揺れるカーテンを指し、誰かいると言いました。

そしてカーテンに向かって突進し、カーテンを竹刀で叩きつけました。バラバラと留め金が落ちて来ましたが湯船から出るわけにもいかず、体を出し気味に耐えていました。怒ったHさんは、ハウスキーパーを呼びつけました。チェチェと舌打ちしながら英語で怒鳴りつけます。キーパーは慣れた手つきで謝り私に出るように合図します。真っ赤な顔をして下着だけ持って私は退散しました。コックのTさんが飛んできました。「飲まなければいい人なんですが、飲むと人が変わってしまうんです。これで何人も被害に遭っています」とのことでした。

ラゴス港は非常に忙しい港です。港に入ってきた船への輸出品の積み込み、輸入品の下し作業、これらの一連の実務は現地の乙仲業者（乙種海運仲立業者）が担当します。船は岸壁での積み下ろしの順番を待って港外に碇を下ろし停泊して待つわけです。ラゴス港では約1か月から3か月の沖待ちを強いられるわけです。我々の荷物は工事現場での機器ですので現場工事の工程と連動しますから遅れるわけにはいきません。港の担当者と掛け合うわけですが、アフリカ時間でなかなか前に進みません。ダッシュの国ですのでやはりお金を使うことになるようです。そんな中ラゴス港の港長の奥様が日本人だということが分かりました。港長とお会いして色々とお話する中で船の沖待ちも解決していったようです。ラゴスの町には「日本人会」があります。商社の人達、昔からお住まいの人達、我々のような工事関係の短期在住者などいろいろです。私も赴任した年に作業員共々新人として催しに呼ばれました。女性の会員の出席が多く華やかな雰囲気の中で一段高い壇上で紹介されます。私が代表して挨拶しましたが、カドナの工事の話などしてやっと終わったような記憶があります。男だけの職場からミニスカートや綺麗な短パンの奥様方の前ですので目がくらみそうになります。違った人種の男達に見えるのか会の中でも人気者になってしまいました。ラゴス港の港長の奥様はなぜか一度も日本人会には出席されてないそうです。期間が終わればすぐ日本に帰る奥様方とのお話など聞きたくないのでしょうか。分かるような気がしました。今回はここまでとします。（続く）